説教　　2024年4月14日（日）復活節第3主日

新約聖書 使徒言行録3章12節―19節（新共同訳）

[12]これを見たペトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに
驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を
歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。[13]アブラハムの
神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光
をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラ
トが釈放しようと決めていたのに、その面前でこの方を拒みました。[14]聖なる
正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。[15]あなたがたは、
命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復
活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。[16]あなたがた
の見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信
じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人
を完全にいやしたのです。[17]ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことを
してしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分
かっています。[18]しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられた
メシアの苦しみを、このようにして実現なさったのです。[19]だから、自分の罪
が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。

新約聖書 ヨハネの手紙 一 3章1節―7節（新共同訳）

[1]御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わ
たしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。世がわたし
たちを知らないのは、御父を知らなかったからです。[2]愛する者たち、わたし
たちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていま
せん。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知ってい
ます。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。[3]御子にこの望
みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます。
[4]罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです。[5]あなた
がたも知っているように、御子は罪を除くために現れました。御子には罪があ
りません。[6]御子の内にいつもいる人は皆、罪を犯しません。罪を犯す者は皆、
御子を見たこともなく、知ってもいません。[7]子たちよ、だれにも惑わされな
いようにしなさい。義を行う者は、御子と同じように、正しい人です。

新約聖書 ルカによる福音書24章36節b―48節（新共同訳）

[36b]イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」
と言われた。[37]彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。[38]そこで、
イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こす
のか。[39]わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。
亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがあ
る。」[40]こう言って、イエスは手と足をお見せになった。[41]彼らが喜びのあま

りまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。[42]そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、[43]イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。
[44]イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」[45]そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、[46]言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。[47]また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、[48]あなたがたはこれらのことの証人となる。

説教「からだの復活」

教会讃美歌　172 番「つくりぬしを」　1,2,5 節、
298 番「心まよいゆくを」、
151 番「ひとの目には」　1,2,4 節、
199 番「主よめぐみもて」　1,3,6 節

本日の福音書は、十字架上で死んだはずのイエスが弟子たちの前に現れ、弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言う場面から始まります。

弟子たちは、恐れ驚き、亡霊を見ているのだと思いました。イエスはそんな弟子たちに、「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか」と言います。「疑い」（ディアロギスモイ）は、理屈、論議とも訳すことができます。理屈や人の判断力では決して受け止めることができない、それらをはるかに超えた出来事が起こったのです。

復活したイエスとの再会の時、弟子たちの心に起きたのは「疑い」でした。以前も弟子たちは、イエスからその「心の鈍さ」を戒められたことがありました（24:25）。そしてこの時も、再び弟子たちの「心の鈍さ」が露呈したのです。

心に疑いを起こす弟子たちに、「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい」と語りかけたイエスの言葉には、神の愛が込められています。そしてその言葉は、時を超えて現代に生きる私たちにも与えられ続けている、キリストの愛の言葉なのです。

イエスが肉体をもって復活したことには、とても大きな意味があります。イエスの復活は、霊のみにおける事柄ではなくて、体の復活でした。イエス・キリストが、霊において復活して弟子たちの前に現れた、というなら、弟子たちもまだ受け入れやすかったかもしれません。しかしイエスは霊のみではなく、生きた体をもって復活したのです。

イエスが「触ってよく見なさい」と言われる通り、肉体とは、触れ合うことのできるものです。観念や概念ではなく、触ることができる実体です。イエスが実在する肉体をもって復活したことは、神の福音は抽象論ではなく、現実の世界に根付き、現実の世界において体現されるものだと示しているのです。

神は、イエスを死から甦らせました。そしてキリストを信じる者の希望は、イエスが生きた体をもって復活したという、この核となる事柄を受け入れ、肯定することにあるのです。

弟子たちが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、さらにイエスは、自分が本当に生きていることを証明するかのように、焼いた魚を一切れ、彼らの前で食べてみせました。

焼き魚は、庶民の日常的な食べ物でした。愛の表れとして、イエスはそこで弟子たちと共にそれを食べたのです。共に食べることは、共に在ることです。食卓にある喜びは、キリストの愛と共にある喜びであり、イエスを愛し続けていく喜びです。

復活のイエスに出会った弟子たちに、信じられないほどの大きな喜びがもたらされました。弟子たちは、この、肉体の死によって終わらない命への招きを知りました。そしてそれは自分一人の中にとどめておけるような喜びではありませんでした。したがって復活のキリストと出会った者たちは、その喜びによって、そのことを語らずにはいられませんでした。その証言は、2000 年後においても聖霊によって聞くとき、生々しい、生きた言葉として響いてくるのです。

聖霊は、イエス・キリストの愛に生きるように、私たちに働きかける存在です。また聖霊は、イエスが共に食べて弟子たちを力づけてくださったように、いつも私たちの傍らにいて、主イエスと食卓を共にして生きることを支えてくれる、光と喜びに満ちた存在なのです。

イエスは、弟子たちにこう教えました。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する」。

「モーセの律法と預言書の書と詩編」とは、旧約聖書全体を意味します。イエスは「聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」言われました。これらの聖書理解がまだなかった弟子たちが理解できるように、復活のイエスが、彼らを生かす復活の命と共に、彼らの心の目を開いたのです。

ここでイエスは、旧約聖書に、ご自身の受難と復活、そしてイエス・キリストの御名による「罪の赦しを得させる悔い改め」が預言されていたと明かしました。そして、弟子たちに「あなたがたはこれらのことの証人となる」と伝えま

した。

「罪」とは、神との断絶です。「罪の赦しを得させる悔い改め」とは、「人が神に立ち帰り、神と一つに結ばれ、神の命を生きること」なのです。

復活したイエスは、疑いをもつ弟子たちに「まさしくわたしだ。触ってよく見なさい」と言いました。

私たちは、十字架の傷跡があるイエスの手に触れることが許されているのです。

そして、イエスがあなたと繋いでくれたその手は、二度と決して離れることはありません。

私たちは、いつでもどんな時でも、イエス・キリストと共にいると、覚えていてください。

弟子たちの前で焼き魚を食べてみせた、慈愛に満ちたキリストは、いつも私たちと共にいます。

今回、私は、イエスが焼き魚を食べる箇所を読んだ時、自然と私自身の父が慈愛に満ちて焼き魚を食べているイメージが湧きました。

父や母と食事をする機会がほとんどない私ですが、これからはなるべくそれを増やしていきたい気持ちになりました。

「罪」とは神との断絶であり、断絶の反対の言葉は「つながり」です。

愛と喜びをもって神と人と共に食べることは、神と人とつながることなのです。

この世界に、喜びの食卓が増えれば増えるほど、世界は輝きに満ちていくでしょう。

イエス・キリストは、いつもあなたの食卓に共にいます。